

社会主義リアリズム論争

——ナルプ解体後におけるプロレタリア文学運動——

桑 尾 光太郎

「キーワード ① 社会主義リアリズム ② ナルプ解体 ③ 革命的リアリズム

④ “階級的独自性” ⑤ 人民戦線

はじめに

社会主義リアリズムが、ソビエトにおける新しい文学理論として日本に紹介されたのは、マルクス主義運動に対する弾圧が苛烈を極めた一九三三年（昭和八）だった。翌三四年二月、日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）は解散に追いこまれた。その解体声明書のなかで、社会主義リアリズムは「プロレタリア文学の創造社会主義的競争」の指針と位置づけられた。ナルプに所属していた作家たちはソビエトの創作方法を積極的に摂取することで、プロレタリア文学の再生をめざした。

では社会主義リアリズムは、日本のプロレタリア文学にとっていかなる意味をもったのか。一九三四年末、川口浩は次のように総括している。

社会主義的リアリズムの問題が移植された当初は、旧ナルプのほとんど全員によつて、歓呼の拍手をもつて迎へられた。とかくこの場合の熱烈な歓迎は、より多く、唯物弁証法的創作方法の批判と、官僚的図式的批評の排撃とに向けられたものと推せられる。おそらく新しい道が社会主義的リアリズムではなくて、なんらかの他の道であつたにしても、もしもそれが彼らを悩ましてゐた唯物弁証法的創作方法の呪縛と官僚的批判の桎梏を打破するものであつたならば、やはり同じやうな拍手をもつて迎へられたであらう。そしてこの呪縛と桎梏とが一応とりのぞかれた現在、人々はそつと社会主義的リアリズムを神棚にまつてゐるかに見える。だからこの国のプロレタリア文学への社会主義的リアリズムの移入は、過去の病根の切除といふ消極的な意義はもつたにしても、建設的意義をどれほど發揮してゐるかは、いまのところ疑問といはざるを得ない。つまり社会主義的リアリズムは、プロレタリア文学の方向を導くところの統一的旗印となつてゐるとは認めがたいのである。⁽¹⁾

社会主義リアリズムを受容しようとする創作方法論は、プロレタリア文学運動のもつていた政治性——文学は日本の現実にどう対処するか——を清算すること（非政治化）で、作家の創作活動を擁護しようとする面をもつていた。「唯物弁証法的創作方法の呪縛と官僚的批判の桎梏」は、共産党の影響下におかれたコップ（日

本プロレタリア文化連盟・ナルプ（日本プロレタリア作家同盟）の組織構造が作家に要請した政治的任務からもたらされていた。ナルプ解体と相まって、社会主義リアリズムは作家の非政治化を合理化する役割を果した²⁾。従って、個々の作家の活動を刺激する合言葉にはなっても、組織的な文学運動を再建する論理にはなり得なかったのである。川口のいうように作家たちの間には、社会主義リアリズムを社会主義がめざましく発展するソビエトの創作方法であると絶対化し、内容も問わないまま金科玉条として済ませてしまう傾向が生まれた。一九三五年（昭和一〇）に入ると、こうした傾向に久保栄・神山茂夫・伊藤貞助が厳しい批判を加えた。彼らは創作方法論に政治性を取り戻すことで、「人々はそつと社会主義的リアリズムを神棚にまつてゐる」状況に風穴を開けようとした。これに森山啓・中野重治が反駁し、雑誌『文学評論』を中心に社会主義リアリズム論争が行われた。

この論争はプロレタリア文学運動における政治性を強調するか、それとも政治性を抜きにして作家の創作活動を擁護するかという、「政治と文学」の問題の根幹にかかわる本質をもっていた。本稿ではそれぞれの論調の主唱者だった神山茂夫（一九〇五～一九七四）と森山啓（一九〇四～一九九一）を中心に、論争の行方と、そのもたらしたものを明らかにしていきたい。

一 神山茂夫・伊藤貞助のナルプ解散批判

神山茂夫の社会主義リアリズム批判には前史がある。神山は盟友の伊藤貞助（一九〇一～一九四七）とともに

に、雑誌『文化集団』にナルプ解散反対の論陣を張った。二人の社会主義リアリズム批判は、ナルプ解散という組織問題の一環として行われたのであるが、ここでは伊藤の「社会主義的リアリズムか！ 日和見主義的リアリズムか！」(筆名佐分武、『文化集団』一九三四年四月)を紹介する。

伊藤は「理論的に、解散が正しいか、正しくないか、それは議論の余地がないであらう。勿論、断固として正しくない」と断言した。伊藤は解散が「或る意味に於ては歴史的必然であったと理解」しながら、「ナルプ中央部が時の流れによつて打ひしがれ敗北することは歴史的必然として合理化されることは出来ぬ」とする。必然だが正しくないという一見かたくな主張には、困難な現実直面した文学運動はいかにあるべきかという問題意識が強く存在していた。現実の社会情勢によつて解散を必然と受け止めるにとどまり、結局現状肯定に落ち着いた多くの作家たちとは逆に、情勢が困難であるからこそ、伊藤はプロレタリア作家としての政治性を強調した。伊藤のナルプ解散反対論は当然、非政治化の論理として迎え入れられた社会主義リアリズムに対する批判に続く。

ソビエトと日本の現実との差異を見ないまま、あるいは日本の現実と創作方法のあり方とを区別して社会主義リアリズムを主唱する作家たちを、伊藤は「プロレタリア文学の鸚鵡達」と揶揄した。伊藤にとって最大の関心事は、文学運動が現実への働きかけを行い得るようなスローガンの創出だった。

この国の労働者農民及び一切の勤労民の置かれた生活的眞実、既に述べたやうな暗黒と飢と……………と
……の眞実を描かねばならない。そしてそれは、この国のプロレタリアートの直面しつゝある…………、彼等の

明日のために役立つ、明日のために彼等を教育し、……せしめる様に描かねばならない。——農民をその封建的泥濘の中から救ひ出し、一切の勤労民の……のために助力し、然も彼等と結んで自らをとき放つための途を突進まねばならぬといふ、二重の複雑な任務を解決するために、昨日を示し、亦明日を示し、今日の日役に役立つ、……対……の突角の……の日に準備するやうなりリズムでなければならぬ(「……」は伏字部分)。

伊藤は文学運動の新たなスローガンとして、「……的リアリズム」⁽³⁾を提唱した。その内容は具体的に語られるに至っていないが、少なくともそれは、プロレタリア文学の非政治化と、それに伴った社会主義リアリズム受容に真っ向から反対してうちだされている。伊藤は「自ら労働者農民、一切の勤労民の文学者であると自負する作家は、角度を失つてはならぬとする。角度とは何か? 弁証法的唯物論の世界観を持つて……: : : な意識ではない。勤労民に味方するもの……: : : : : 情熱——怒り——良心をさすのである」と、ナルプ解散批判を結ぶ。「角度」は「情熱——怒り——良心」とは、日本の現実にあつては革命的たらざるをえない。ところがナルプ解散と社会主義リアリズムの受容には、その「角度」が失われているのではないかというのが、伊藤の主張の核心であった。単純明快、かつ堅持することの困難な「角度」をもって、伊藤はプロレタリア文学の非政治化に立ち向かったのである。

『文化集団』一九三四年五月号では特集「ナルプ解体に関する大衆的討論」が生まれ、上原清三(神山茂夫)ほか一〇名の読者投稿が掲載された。そこでは伊藤に呼応してすべてが解散反対の態度を取り、①ナルプ解散

後における運動方針の明確化、②旧ナルプ指導部、ひいては過去のプロレタリア文学運動に対する自己批判、③①②に関連した大衆的討論の実施、が要求されていた。神山の「左翼」作家への抗議」は、ナルプ解散の誤謬と指導部の無責任とを糾弾し、ナルプ幹部にむかつて次のように呼びかける。

君達の解体「理由」が正しいと思ふなら、未だ「良心」で奴が残つてゐるなら、責任を感じるなら公然と述べよ。おそ蒔きでもいゝ大衆討論を組織せよ。そこで我々は、堂々と討論しようではないか！

「過去の全活動の徹底的自己批判」と、「創作方法上のスローガンの訂正」と「情熱に応じた再組織」等々のスローガンの下に、ナルプの大会を開催し、「改編」を含めて今後の方針を決定すべきである。(初出誌での伏字部分は圏点で示し、『神山茂夫著作集』第一巻「三一書房 一九七五年」によって補充した。神山の引用資料については以下同様)

「大衆的討論」の要求にこたえ、『文化集団』は次号でも解散問題の特集し、「解体」の当時者たる旧ナルプ中央部の人々、及び有力なメンバーに、この問題に関する意見を述べていたとくつもり⁽⁴⁾と予告している。ところが翌六月号には、ナルプ解散についての意見は一つも掲載されなかった。伊藤や神山が『文化集団』に寄稿した論文も発表されなかったという⁽⁵⁾。

伊藤や神山の主張は、プロレタリア作家の多くに嫌悪感をもって迎えられた。政治的重圧から逃れるためナルプを解散し、創作実践の発展を期して社会主義リアリズムを支持した作家たちにとって、主に組織論の見地

から解散に反対したことは、創作活動に対するいやがらせと映ったのである。

森山啓は、「最近の「文化集団」にのつた佐分、上原といふ二氏の論文は、解散の手続に誤りがあつたとか、「闘はざる敗北」であつたとか論じてゐるが、一読していかさまものであり、陽気な尻尾をもつた野次馬であることが分る」(『プロレタリア文学の現勢』『中央公論』一九三四年七月、傍点原文)と、嘲笑まじりに非難した。森山には伊藤らの批判の核心が、プロレタリア作家の「角度」の問題と大衆的討論の要求にあることを理解できていない。しかしほとんどの作家は、伊藤や神山の主張を批判の対象にさえ取りあげなかった。「大衆的討論」の要求は黙殺されたのである。

二 神山茂夫の革命的リアリズム

「プロレタリア文化運動はどんな見透しを持つてゐるのか? と云ふ問題に一般的に答へることは間違である。それはその国の、その時期の、その階級関係、殊にその国の支配階級の文化政策に対応して定められる」(『プロレタリア文化戦線の見透し』『生きた新聞』一九三五年一月)とする神山茂夫に、「見透し」を与えたのはいうまでもなく三二年テーゼである。神山はテーゼに沿って、次のように「見透し」を定めた。

ブルジョア地主が権力を握り、それが、大きく、野蠻的な、半封建的搾取をやつて居り、労働運動抑圧に当面してゐる国、しかもその国の特殊の構成的矛盾、経済的政治的矛盾によつて、むしろ自然発生的なブル

ジ。ヨ。ア。民。主。主義。革命。が。必。然。で。あり、その。社会。主義。革命。への。急。速。な。転。化。の。可。能。性。の。多。い。国。か。ゝる。国。々。では「労働者階級の多数者獲得」ではなく、先づ全般の人民闘争の中に於けるプロレタリアートのヘゲモニーを確立することが中心問題なのであることでは「多数者獲得」ではなく、むしろ続発する大衆運動に参加し、基準と方向と指導を与へることが任務である。(同前)

以上の任務は、「運動全体の一部である文化運動」にも課せられる。プロレタリア文学運動においても、「文化組織の組織的基礎をどこにおくか、どんな層を動員すべきかの問題が、従つてナルプの再組織の問題が」(同前)、「見透し」に沿った形で検討されなければならなかった。

しかしナルプ解散後における文学運動は、「革命的。文化。運動。の。危機。を。叫。ぶ。者。は。多。い。と。ころ。が。只。の。一。人。も、この戦略的問題を大胆に提起してゐるものはいない」状態にあった。「革命的。文化。運動。の。真。の。危機。は、危機そのものにあるのではなく、実にここに、即ち危機の本質的根拠の追及を全く放棄してゐるところにあるのである」(同前)。神山にとって真の危機とは、プロレタリア作家の非政治化と、それがもたらす運動への無批判・現状肯定であった。

神山は「社会主義的リアリズムの批判」(『生きた新聞』三五年二月)を発表し、創作方法論に参加した。「この国は社会的経済的構成において、かの国におかれてゐるばかりでなく、プロレタリアは、当面封建勢力の清掃を戦略目標としている。ここに、跳越えることのできない客観的現実の差異、全見透しの差異がある」と現状を把握する神山にとって、文学運動には「単なる創作或は批評の方法の問題ではない」、「作家のプロレタリ

アートに対する積極的態度および全国的な統一の組織の結成と結びつくところの、文学及び批評の基準としての文学スローガン」が樹立されなければならなかった。ところが社会主義リアリズムという「今日のこのスローガンの支持者と自称している多くの人々」は、「社会主義が我國の現実に一定の前提条件として存在してゐることを一面的に評価し、何より全体的な決定的な役割を演じてゐるところの政治的經濟的諸制度を見失ひ、他方その変革に一定の独自性をもつて参加すべき文学の積極的役割を過少評価し、且つ「社会主義」という一つの政治的傾向をかつき廻すことによつて、全人民的文学の建設とその指導を放棄し、最後に自らの文学組織の再建を回避している」。したがって、「彼らは、心で何を思つているにせよ、客観的には敗北現象や解体的現象の「理論」的擁護者の役割を現実に演じてゐる。そしてこの人達は、このスローガンを支持するということだけを前面に出し、他の問題を背後に押しやり、国の真にリアルな姿に目をおぼつている」と批判されるのである。

では神山は、「この国」における文学運動のスローガンをどのように設定するのか。神山は「プロレタリア文学の指導下における全人民的革命文学、革命的ロマンチズムを内に含むところの「革命的リアリズム」を提唱した。そして、そのスローガンは次のように考えられた。

単に「社会主義」的文学だけではなく、プロレタリア文学のヘゲモニーの下における凡ゆる政治的傾向の革命文学——国の革命の性質が強行的に社会主義に転化する可能性をもつとはいへ、当面ブルジョワ民主主義的なのだからまとまつた政治的傾向をもたず思想もたずとも、又農民的に、都市貧民的に、或は民族的

にその階級的立場や層が違つてゐるにも拘わらず米と平和と自由といふ点で一致するところの全人民文学の統一的スローガンとなる。

神山は「社会主義革命への強行的転化の傾向をもつブルジョワ民主主義革命」という、三二年テーゼに沿つた文学運動のスローガンとして、革命的リアリズムをうちだした。その主張は、ブルジョワ民主主義革命を当面の目標におくことで、「革命的文学運動」の担い手を拡大しようとしたものだった。神山はスローガンに明確な政治目標を与えることで、さまざまな政治的傾向や思想をふくむ統一戦線のスローガンに成長することを期待した。神山の「見透し」は、非政治化に陥つたプロレタリア文学に現実変革の契機を与え、さらに多様な階層を含む統一戦線の組織という、具体的な運動方針をうちだしたといえる。

しかし三二年テーゼに基づく統一戦線論には、人民戦線思想において重要な契機となるファシズム認識、とくに日本におけるファシズムと天皇制との関係の認識に欠陥をもっていた。神山は革命的リアリズムを「米と平和と自由という点で一致するところの全人民文学の統一的スローガン」と説き、その中に「反ファシズム」を含めなかった。

『生きた新聞』一九三五年一月号には神山の「幽霊ファッショ論」が、「プロレタリア文化戦線の見透し」と並んで掲載された。その内容は、ファシズムとはブルジョワ支配の最終形態であり、ブルジョワジーが自己の支配をいまだ確立していない日本にあるファシズムの実態は、「幽霊ファッショイデオロギー」封建勢力の増大である」というものだった。神山は日本に顕在化しているファシズム的現象を、「むしろ派生的な副次的

なもの」に過ぎず「封建的勢力の本質と、その最近の強化を隠蔽するためのみ役立つてゐる」と見た。こうした見地からは、封建的勢力の打倒を目標とした場合、反ファシズム運動は革命の本質から離れているという認識が生まれる。神山における天皇制打倒と反ファシズム運動との峻別も、三二年テーゼで強調された社会ファシズム論の引き写しだった。

神山が描く統一戦線とは、「階級的立場や層が違っている」作家たちをプロレタリアートのヘゲモニーの下に統一させたものであり、あくまでも「下からの」統一が成立条件だった。反ファシズムが統一戦線の目標とならなければ、反ファシズムを志向する自由主義作家たちは、革命的リアリズムのスローガンから除外される。プロレタリア作家と他の階級的立場にある作家との共同闘争、という意味での統一戦線の意義は失われるのである。

革命的リアリズム論は三二年テーゼ自身の矛盾——統一戦線志向と、ファシズム認識に示されるセクト性——を孕んでおり、階級枠を超えたという意味での、人民戦線的な発想ではなかった。当時藤森成吉がプロレタリア作家と自由主義的作家との協力を説いていたこと⁽⁶⁾を、神山は次のように非難をしている。

労働者農民の革命的民主的独裁をめざす場合、すなわちブルジョワ民主主義革命の場合の同盟者は、農民および都市貧民とであり、妥協的、自由主義的ブルジョワシーを孤立化させることに主要努力をむける。

(中略) 藤森の自由主義との同盟論は大間違ひで、「政論的に」語るかぎり、逆に自由主義と対立し、同盟者としての民主主義的農民及び都市貧民の上における影響と指導権を争つてゐるのだ。自由主義者との同盟と

ころか、正に彼らに向かつて攻撃を集中しなければならぬのである。(「文壇の諸大家へ一言ずつ」『生きて新聞』一九三五年三月)

神山の「幽霊ファッシュ論」は、野坂参三らによる『国際通信』で、「来るべき政府には、天皇制要素より緊密に、より強力に結びついた独占資本が政治的重要性を倍加するであらう事実」を見落としていると批判された。『国際通信』におけるファシズム認識は、日本の共産主義者が「反ファシズム」を目標とする自由主義者や社会民主主義者との共同闘争——人民戦線の結成——へ向かうことを可能にした。一方神山も三二年テーズの矛盾を内包しながら、共産主義者と社会民主主義者との協力による『労働雑誌』の創刊準備をすすめていたといふ。⁽⁸⁾

しかし神山は、革命的リアリズムを人民戦線的な方向へ導く暇もなく、一九三五年七月伊藤貞助らとともに共産党再建容疑で検挙された。人民戦線への発展の可能性を少なからず有していた革命的リアリズム論は主唱者を奪われ、理論的成長の中断を余儀なくされたのである。

三 社会主義リアリズムの擁護——森山啓——

「あらゆる文学方法と様式のその本質、根本的性格を規定するものは、下部構造一般ではなくて、階級社会ではその文学の代表する階級層の特定時代における実践なのである」(「社会主義的リアリズムの「批判」」『文

学評論』一九三五年三月) というのが、森山啓の基本的な立場である。森山にとって、日本の社会情勢や階級闘争への展望に合わせて創作スローガンを変更することは、作家の創作家実践および主体性の無視を意味した。

吾々はプロレタリア文学方法について語り得る。吾々は農民及び小市民層の……的文学について語り得る。そしてブルジョア民主主義獲得以前の国におけるプロレタリアートの文学の具体的な任務と農民及び小市民の……的文学との同盟について語り得るし又知り得る。だが吾々はそのためにプロレタリア文学の階級的独自性の抹消がありえないこと、「……的文学」一般はあり得ないことを、自明のことと知つてゐる。しかるに北君(北巖二郎)神山茂夫、引用者注)らは、巧妙にプロレタリア文学の独自性を消してゐる。しかも吾々の作家の仕事から、単に小市民性のみを引き出して、客観的には明かなる嘲笑をあげせるのみで激励をもつて具体的批判をせず、揚句に、プロレタリア文学の側への僅かな努力や、その可能性を見ずに、「……的」文学の埒内にとどまらせてゐる。(同前)

森山は神山の社会主義リアリズム批判を、プロレタリア文学の「階級的独自性の抹消」と非難する。前に見たとおり神山の主張は運動論・組織論であり、「ブルジョア民主主義獲得以前の国におけるプロレタリアートの文学の具体的な任務と農民及び小市民の……的文学との同盟について」語つた以上のものではない。そのプロレタリア文学に政治性を付与させようとする主張が、森山にとっては階級的独自性の抹消なのである。

平野謙は神山の主張を、「主として革命運動再建の立場にたつ一種の政策論、戦術論」であり「文学理論上

の問題提起としてみれば、内部事情にくらい政論者流の政策論⁽⁹⁾と評した。そのために文学理論として社会主義リアリズムを論じた森山との間にギャップが生じたと見ている。だが森山に顕著な傾向は、政策論・運動論的な批判および提唱を受けているにもかかわらず、それを無視して反駁していることである。この点を平野のようにギャップとして済まさず、なぜ森山が政策論を無視した議論に陥るかを考えなければならぬ。

森山は日本のプロレタリア文学が、「未だ作品の実践に充分に結びつかず、又プロレタリアートの一時的敗退といふ事情のためにも影響されて甚だしく政治的力を去勢されて来ている」(『社会主義的リアリズムの「批判」』)現状を認めている。しかし社会主義リアリズムの発展を阻害する「プロレタリアートの一時的敗退」という現実はどう対処するかを、文学創作上の課題に挙げなかった。「いかなる社会現実に当面しても、作家は高い世界観と、創作実践のために研究された正しい方法をもてば持つほど、文学は優れたものとなるのである」(『同前』)という森山の一貫した姿勢は、プロレタリア作家としての「世界観」「党派性」を守り抜こうとする気概を示している。しかしその姿勢は、結果として社会現実と創作実践とを切り離す方向に進んだ。換言すれば森山のいう「プロレタリア文学の階級的独自性」とは、政治に対する文学の自立性を強調せんがために、プロレタリア文学の政治性——現実に働きかける契機——を解消してしまふ矛盾を孕んでいたのである。矛盾は、森山が社会主義リアリズム擁護を重ねる度にあらわになっていった。

「生産諸関係としての社会主義が存在しない限り、たとえば森山啓君がどう主張しようと、日本の現実を前にした吾々のリアリズムに、社会主義といふ字を冠することは、できない相談である」⁽¹⁰⁾との久保栄の批判に反駁すべく、森山は「プロレタリア・リアリズムと「社会主義的リアリズム」」(『文学評論』一九三五年四月)

を発表した。森山は久保に、「社会主義的経済体系の基礎の上に立つてゐるといふ意味での「社会主義的リアリズム」が、日本に今存在し得るなどとは考えてゐない」と応じる。これは「けだし、プロレタリア作家は、歴史的必然の道における歓喜に溢れた建設の諸過程に対しても、歴史的没落の道における他の階級の醜悪に充たされた生活過程に対しても、ひとしく一つの芸術的態度をもつて臨むべきだ」（「否定的リアリズム」の批判）『文学評論』一九三四年五月）というかつての発言とは矛盾しているが、森山はエンゲルスを援用しながら、生産諸関係としての社会主義が存在しなくとも「日本のプロレタリア文学におけるリアリズムの可能な発展を特徴づけるために、それを社会主義的リアリズムと呼び得る」と力説する。

「生産力と生産方法との矛盾は、例えば人間の原罪と神の正義との矛盾の如く人間の頭の中で生れたものではなく、全然客観的な、我々の外にある、それを作り出した人々の意志や行動などから独立せる、事実の中に厳存するものである。実に近代社会主義はかゝる矛盾の思想的反映に他ならない。就中先づ、直接かゝる矛盾に苦しんでゐる階級——労働階級の頭の中に於けるその観念的反映に他ならない。」（岩波版「空想から科学へ」六五頁。）

さうだ、資本主義国におけるプロレタリア・リアリズムの社会主義的性質は、資本家社会の現実の矛盾の文学イデオロギーへの反映によつてこそ生れてゐる。それは斯かる社会の経済的事実における矛盾にこそ現実的根拠を持つてゐるのである。久保君から斯かる事実を見ないばかりか、中野（重治Ⅱ引用者注）君が批評したやうに、「日本の現実」なるものを世界の現実より切り離し、「生産諸関係としての社会主義が」地上

にあり、それが如何にこの国の現実をも規定し、その社会的政治的文化的的生活に反応してゐるかを見ないかの如くである。

社会主義リアリズムが、「資本家社会における矛盾の文学イデオロギーへの反映」によつて生まれる創作方法ならば、それは日本でも成立し得る。しかしそれは、これまでのプロレタリア文学運動の「当面の任務」から切り離されることになる。現実の中で運動がいかなる状態にあつたとしても、プロレタリア階級と階級矛盾が存在する限り、社会主義リアリズムは運動の現状とは無関係に成立するからである。

森山は「文学方法の問題は、プロレタリア・リアリズムと呼ばれてゐた時代から、唯物弁証法的創作方法と呼ばれてゐた時代を通つて、究明された新たな多くの基本的知識を加えてゐる。そこで今日において発展し得るプロレタリア・リアリズムを「社会主義的」と呼んだのである」と説明した。だがそれは勿論、ソビエト文学の「基本的方法」と規定された、社会主義的生産諸関係の下での創作方法ではない。かつての「プロレタリア・リアリズム」や「唯物弁証法的創作方法」から政治性を除去したリアリズムだった。ナルブ解散後における指導的創作方法と目された社会主義リアリズムは、政治性を失つた合言葉、つまり運動論としてみれば空手にすぎない。しかもその空手形が、ソビエトにおける社会主義リアリズムとの差異を曖昧にしたまま、あたかもプロレタリア文学の発展を約束するような形で受容されていたことが、森山自身の言葉から暴露されたのである。

社会主義リアリズムを擁護する森山は、「政治と文学」の緊張関係を云々することへの関心を喪失していた。

神山茂夫が「この国の見透し」から革命的リアリズムをうちだしたことに對し、森山はそれを正しいと認めながら、「見透し」そのものについては何の関心も抱かない。

同君が日本とソ同盟の各々の社会における客観的及び主体的な条件の差異について行つてゐる分析は正しいと思ふ。北君は私達が「客観的現実」なるものを一般化して真の具体性において取り上げるのを怠つてゐると指摘し(中略)また単にプロレタリア文学のみならず「全人民的文学の建設とその……………」について書いてゐる。これらは重要である。だが私達は、これらのことについては何度となく聞かされ、又みづから論文の中でも認めて來てゐるのである。北君のいふ「見透し」はアイマイにされてはならぬが(中略)そんな一般的な事を何百遍口ずさんで見たところで、それだけでは創作の具体的指針は得られないといふことである。(「中条の『乳房』その他」『文学評論』一九三五年五月)

森山は神山の「見透し」を、あくまで「一般的なこと」「何度となく語られて來た」「暗唱された経文の一節」と受け流し、それを批判の対象としていない。運動論などウンザリだというわけである。となると「本当の批評は生活の中から生れ、且つ生活のために戦ひ得るものでなければならぬ」(「批評家不平あり」『文学案内』一九三五年九月)といった森山自身の発言も、現実を無視した空疎な言葉と理解せざるを得ない。正しく現実を認識し、真実を芸術的表現に高めることをめざした社会主義リアリズムの提唱者は、創作方法論から政治的契機を取り去ることで、現実そのものへの関心を失うに至つた。

久保栄は森山を、「資本主義的現実のなかに実在的「可能性」として存在する社会主義を「現実性」と見誤り、観念体系と経済体系を混ぜこぜにして考えてゐる」と攻撃した。⁽¹¹⁾「可能性」と「現実性」との混同は、現実社会に存在する社会主義的要素に対する過大評価を生む。さらにそれは、文学運動における現実に対する働きかけ——政治的要素——を弱くし、現状肯定に陥っていく態度を準備する。かくして久保は、「森山啓の社会主義リアリズム論は、退却的なものとなり、すでに述べたとほり吾々のプロレタリア芸術と……芸術との当面の具体的任務に対して何らの指標をも与へ得ないまでに無力化した」と断定したのだった。⁽¹²⁾

この批判は決定的だった。森山はただちに反駁したが、その大筋は、久保や神山が日本の現実における生きた文学の流れや作家たちの活動について何ら歴史的・具体的につかんでいない、さらには文学方法が「社会運動全体の一問題たると同時に、個々の作家達の自己の成長のための問題でもあることを没却してゐる」(「反対論者に答へる——生活、世界観(承前)——」『文学評論』一九三五年六月)といったものだった。これでは久保の批判点からずれた発言を繰り返しているにすぎず、批判への回答になっていない。力なく久保に応じたあと、森山は論争から離れてしまった。

四 論争の終結

『文学評論』一九三五年三月号から連載された特集「社会主義的リアリズムの再検討」は、同年七月号を最後に打ち切られた。理由は作家の多くが論争に無関心であったからだといふ。⁽¹³⁾ところが論争の打ち切りには、

反対者がいた。反対者とはいわゆる作家批評家ではない、『文学評論』の読者たちである。一九三六(昭和一
一)年に入ると読者投稿欄「批判と主張」には、社会主義リアリズム論争の再開を要求する投書がしばしば掲
載されるようになった。

南龍夫「社会主義リアリズム確立のために」(『文学評論』一九三五年一月)は、久保栄が社会主義リアリ
ズムを文学の創作方法としてではなく、文学運動を組織するためのスローガンとして理解している点に言及し、
そのこと自体まちがってはいないが、「かくてはプロレタリア作家はどこへ行つたか、そして彼らは一体どの
やうに文学すべきかといふ問題は消えてなくなつてゐる」と批判した。一方で南は、「所詮吾国のプロ作家達
は社会主義リアリズムの機械的輸入を企てそれを盾にしてイデオロギーの過少評価、従つてプロレタリア的現
実への実践的潜入の拒否を合理化した如く考へられるのである」と社会主義リアリズム擁護論の非政治化も追
及し、「資本主義国のプロレタリア作家達には強い世界観が強く強く要求され、そのためにプロレタリア的実
践が激しく要求されてゐる」のであると結論づけた。ここでいう「プロレタリア的实践」には、単なる創作実
践ではない階級闘争の一翼を担う実践という意味が込められている。この点南の主張は、「資本主義国におけ
るプロレタリア・リアリズムの社会主義的性質は、資本家社会の現実の矛盾の文学イデオロギーの反映」だと
する森山啓とは鋭く対立する。南は社会主義リアリズム論において、プロレタリア作家にとって創作方法と
「プロレタリア的現実への実践的潜入」の指針となる戦術論とを、同時に議論することを主張したのである。
島田照夫という投稿者は、南の論文が「我々の注意を喚起する多くの者を持つてゐるにも拘はらず、我々の
間に殆んど問題となつてゐない」現状に飽きたらず、次のように述べる。

南氏に於いては窪川鶴次郎氏が指摘したやうに思想・イデオロギーの絶対確保を全面に強調した余り、或ひは技術的方法の問題が陰をうすめてゐるぎりひがあるかも知れぬ。そしてまた森山啓氏が云はれてゐるやうに、今までの論争の途上で立てられた一般論を、しかし新に明確に処理裁断してはゐるが、繰り返してゐるに過ぎないものであるかも知れない。しかし問題は、南氏が正しい原則を語ることによって、現在のプロレタリア文学に新なしかも重要な課題を提出してゐる、といふところにあるのではなからうか。(『社会主義リアリズムの問題——南龍夫氏への感想として』『文学評論』一九三六年二月)

南や島田のねらいは、何の成果も生まないまま立ち消えにならうとしていた論争を、再び活性化させることにある。彼らは、森山啓・神山茂夫・久保栄のそれぞれの主張を止揚する論理の出現を期待した。それは強い世界観に裏打ちされた創作実践の指針であるとともに、現実の階級闘争のスローガンとしての要素も兼ね備えた方法論の要求であり、こうした要求は社会主義リアリズムに関する読者投稿のほとんどに共通している。

社会主義的リアリズムの問題は、その適用の可否に関する無限の論議は不必要なのである。一步出てこの国の文学への実際化の命題こそが解かれなければならぬ。ところがことこれに関しては熱意も積極性も殆んどみられず、いまだに具体化のための緒口にさへ到達してゐないのである。(新郷悟「批判と主張」欄の意義)『文学評論』一九三六年三月、傍点原文)

作品は現実の要求に立ち遅れてゐる。しかし批評は更に作品に立遅れてゐる。何よりも現実が研究されなければならぬ。(中略)しかし眼前にあるのは未だに社会主義的リアリズムの認識論的契機についての果てしも知らぬ論理的検討であり、ゴリキイの尻について廻つてその引用主義者となり^マことである。理論は現実の行動の指針として、現実の分析の中から樹てられねばならぬのであるが、それは屢々抽象理論の図式的演繹として立現れ、或は印象批評の仮面を被つて恣のままに現実を裁断する。何よりも現実への肉薄をこそ作家と評論家は競ひ、格闘しなければならない。(乃代恒次「社会主義的リアリズムへの道——覚え書として——」『文学評論』一九三六年四月)

森山がよく使ふ「現実から出[・]発[・]す[・]る[・]」とか「未来を書く」といふ言葉は、創作方法に具体化し様として真面目に考察すると、粉飾されたアイデアリズムか、さもなければ意味の不明瞭な空語であることが解る。

(治田一「逆立せる「社会主義的リアリズム」」『文学評論』一九三六年四月、傍点原文)

『文学評論』がいらだちにも似た論争再燃要求を掲載したことは、あるいは編集者サイド(編集責任者は渡辺順三)の意図だったかもしれない⁽¹⁴⁾。しかし森山啓・徳永直・中野重治といった『文学評論』に関係したとみられる作家評論家は、読者からの要望に反応を示さず、創作方法に関する議論を再開するには至らなかつた。わずかに、窪川鶴次郎の以下のような問題意識が目につく。

私の知る限り、芸術的方法と世界観の問題は、日本においては、まだ少しも解決されてゐない。解決されてゐないのみではない（中略）この問題が日本のプロレタリア芸術にとつて今日いかに、重要な意義を持つてゐるか、といふことは殆んど理解されてゐないやうである。この問題はまた、日本のプロレタリア文学が解決を迫られてゐる根本的な問題と密接な関係を持つてゐると思ふのであるが、それらの根本的な問題との関連がどの程度に考察されてゐるだらうか。（『芸術的方法と世界観』『文学評論』一九三六年四月）

ここでいう「根本的な問題」とは結局、プロレタリア文学が日本の現実にどう対処すべきかに尽きる。この問題に、江口渙が明快に答えている。

われわれの文学は、断じて少数者の文学であつてはならない。あくまで広い範囲の人民大衆の文学とならなければならぬ。全人民に愛されることによつて、その広汎な支持の力によつて、客観的情勢の圧力の鉄壁に抗し得るやうな、さういふひろい文学とならなければならぬ（中略）先づわれわれは広汎なる人民層の有ゆる部分に結びつくといふ意味において文学に対するわれわれの視野を、在来のそれとは打つて變つたほどに、思い切つてひろく押しひろげなければいけない。そして、ひろく人民大衆に愛され親しまれることに先づ新しい考慮が払はれなければいけない。今後ますます強まり行く政治的圧力に対して、さうする以外にわれわれの文学を生かす方法はありません（『文芸時評』『文学評論』一九三六年五月）

この発言は、二・二六事件に象徴される国内でのファッショ化の進行と、一方ではフランスやスペインにおける人民戦線運動の成功を背景として行われた。江口は当時文化運動における人民戦線実現にむけて尽力した一人であり、ファシズムの圧力に抵抗する力をもった「人民大衆の」広汎な文化地盤を形成していくことこそ、文学運動の当面の課題であると主張していた。⁽¹⁵⁾ こうした課題を窪川が「解決を迫られてゐる根本的な問題」として、芸術的方法と世界観の關係から検討するならば、その姿勢は社会主義リアリズムの再検討を要求する読者の声に、作家の側から応えようとしたものと評価できる。プロレタリア文学運動が人民戦線的に展開していくためには、創作方法論と運動論さらに戦術論の両面から、社会主義リアリズムの批判的再検討が必要だったのである。

ところが多くのプロレタリア作家・評論家は、社会主義リアリズムの再検討——現実に対するためのスローガンの創造——に消極的だった。『文学評論』は発行元のナウカ社が一九三六年七月に弾圧をうけ、同年八月号を最後に発行不能となった。プロレタリア作家は活動拠点を失ったわけだが、それ以前から日本でも取り沙汰されていた人民戦線に関し、積極的な活動を起こすことができなかった。

プロレタリア文学運動と人民戦線との——個々の活動はあり、それらを過小評価できないとしても——理論的な接続は行われることはなかった。従って文化運動における人民戦線は、組織的な活動として成立しないまま、それにむけての萌芽的段階のうちに、時勢に押し流される形で消滅したのである。その要因には、日本における社会主義リアリズムの扱い方が影を落としていた。

おわりに

本稿では社会主義リアリズム論争を通して、ナルプ解体後のプロレタリア文学における運動論・組織論を検討してきた。プロレタリア文学運動が現実に対応した論理を持つことができず、反ファシズム人民戦線運動を形成できなかった最大の原因は、作家たちを覆った非政治化にあった。

実質的に共産主義運動の一翼を担っていたナルプの作家が、「ブルジョア知識人」と手を組み人民戦線を成立させるには、現実はどう対処していくかという政治姿勢——戦術——が必要となる。非政治化は現実との関係を拒否し、そのことによって文学のプロレタリア的党派性を守ろうとする姿勢として現れた。社会主義リアリズムという合言葉は、「ソビエトの方法」というだけで、「階級的独自性」の保持という名分の下、戦術の放棄に貢献したのである。

現在、社会主義リアリズムの理論的内容を追究することに意味があるとは思えないが、その内容はともかく社会主義リアリズムは、一九三〇年代の人民戦線運動の中で「ソ連作家と西側の進歩的作家とを創作的に結びつける懸橋となった」と評されている。しかし日本において、社会主義リアリズムの紹介は人民戦線の成立にとって、まったくマイナスに作用した。久保栄や神山茂夫による政策論・戦術論の見地からの批判はあったが、あくまでも少数派であり、この時期の文化運動に影響力をもったとは言いがたい。『文学評論』の投稿にあらわれた論争徹底化の要求も、無視される結果に終わった。

本稿では社会主義リアリズム受容を通しての非政治化の担い手として、森山啓という人物をとりあげた。森山はプロレタリア文学を擁護するがゆえに、日本の階級運動がおかれている現実を目をつぶり社会主義リアリズムの正当性を主張したが、このことは森山個人の問題に帰するものではなく、当時のプロレタリア文学運動における典型と位置づけられる。

戦術を持つとしない分、プロレタリア作家たちには現実に対する抵抗の契機が少なくなる。一九三五、六年以降、多くの作家がなしくずしの転向の深化⇨体制迎合の道を歩んでいった一因も、文学運動の非政治化に求めることができるだろう。

補注

- (1) 「歴史的検討への要望」『理論』一九三四年一二月。
- (2) 拙稿「森山啓の社会主義リアリズム論—プロレタリア文学運動と人民戦線に関する一考察—」『学習院史学』三〇号 一九九二年。参照。本稿はこの統編となる。
- (3) 伊藤は「プロレタリア文学運動の再認識のため——コップの自己解散を要求する——」(『文化集団』一九三三年一月)で、「革命的リアリズム」と推測できる創作スローガンを提唱している。しかしその説明部分は、伏字と削除のためほとんど意味が取れない。
- (4) 『文化集団』一九三四年五月。同号「編輯ノート」でも「ナルブ解体して問題尚つきず(中略)何れが是か非か?編輯部は更に来月号をまつて数十頁をさいて凡ての腹の中の陳列会場とすることを恐れず。然し問題はどしどし発展せしめられたし」と記されている。
- (5) 「僕は昨年の四月号『文化集団』にこのことについて書いた。其後も色々書きたいことがあり、書いたのであるが、すべて暗に葬られた」(佐分武「社会主義的リアリズム」を論ず——てんこう文士退治」『やあ諸君』一九三五

年三月)。

- (6) 「二つの問題」『文学評論』一九三五年一月。
- (7) 「天皇制とファシズム」『現代史資料(14)』。一九六四年。みすず書房。
- (8) 「日本における人民戦線の問題」『神山茂夫著作集』第二巻。参照。
- (9) 「文学・昭和十年前後」『平野謙全集』第四巻。
- (10) 「迷へるリアリズム」『都新聞』一九三五年一月二〇〜二三日。
- (11)(12) 「社会主義的リアリズムと×××」『反資本主義』リアリズム——前者の中野・森山の企曲に対して——『文学評論』一九三五年五月。久保栄の社会主義リアリズム論争における主張については、本多秋五「久保栄と社会主義リアリズム」『久保栄全集』第六巻、一九六二年。三一書房) 参照。
- (13) 「不思議に思はれるのは、本誌に連載中の「社会主義リアリズムの再検討」である。森山、久保、金、川口、小堀、中野等が参加してゐるが、他の実に多くの作家は無関心のやうにみえる。何故か。この再検討が人を無関心にするやうに出来上つてゐるからである。森山は作品に即して問題を進めてゐるが、大部分は文芸政策を抽象的に論じてゐるにすぎぬ。文芸政策を論するのが悪いとは言はない。しかし、人を眠くさせないやうにすることが大切である。この再検討は一応うちきるそうであるが、その方がいゝと思ふ。」(亀井勝一郎「文芸時評」『文学評論』一九三五年八月)。こうした発言からも、当時の作家がいかに「文芸政策」に無関心であったかが察せられる。
- (14) 『文学評論』一九三六年五月号の「批判と主張」には、投稿の撰者に中野重治の名がある。中野は「三つの問題」についての感想(『文学評論』一九三五年三月)で、森山の主張を支持し久保・神山に激しい非難を浴びせた。しかし後に、「僕は革命的リアリズム、批判的リアリズムといふものを否定するものではなく、むしろそれこそが日本文学の全体に非常に強く盛り上がつてこなければならぬとおもつてゐる(中略)なおこの問題では、僕もこれからもつと勉強したいと思つてゐる次第だ」(『最近の二つの問題』『生きた新聞』一九三五年五月)と意見を變更している。
- (15) 江口渕の文化運動における人民戦線の提唱については、「学芸自由同盟の復活について」(『社会評論』一九三六年二月)、「ロマンティック・リアリズム」・「新しき日本文学の建設のために」・「行動主義は何処へ行く」(『人民文庫』

- 一九三六年三・四・五月、「人民戦線と文学」(『都新聞』一九三六年九月一九(二二日))などを参照。
- (16) かつてナルプ支部で活動していた同盟員のなかには、人民戦線運動に積極的に参加していったものもあった。第一節で紹介した『文化集団』の特集「ナルプ解体に関する大衆的討論」に、「界の一労働者」として解体反対の主張を投稿した宮西直輝は、同人誌発行や他誌との交流・新劇公演や作家の講演会の主催など、「あらゆる機会を利用して意識的に、さまざまな形のグループを作り、かなり大胆に政治意識の変革に努めた」という。宮西はこうした運動を、「文学に転向して行った人々との共同戦線、つまりおのおのの立場を尊重し、彼らの創作意欲を高める方向で、みずから学び、各人の能力に応じて協力を求める柔軟な人民戦線的活動だった」と評価している(『ナルプ解体と多数派』『運動史研究』1 一九七八年)。実態の解明は今後の課題である。
- (17) 江川卓「社会主義リアリズム」『平凡社百科事典』6 一九八五年。

The controversy in Socialist Realism

—The proletarian literary movement after the disbandment of the NALP—

Kotaro KUWAO

The Socialist Realism, which was proposed in the Soviet Union as a literary theory, was recognized in Japan as a guide of writing for authors of proletarian literature after the disbandment of the NALP (the association of Japanese proletarian literature authors) in 1934. Nevertheless, the failure to consider the difference of social systems between the Soviet Union and Japan caused the original concept of proletarian literature to be transformed into a new concept—namely the “intentional ignorance of reality”. KAMIYAMA SHIGEO and ITO TEISUKE criticized Socialist Realism from the aspect of communist reformational movement and proposed Revolutionary Realism as the slogan of their literary movement. Contrary MORIYAMA KEI argued against their idea in order

to support the proletarian idea of “class originality”.

This controversy’s main issue was the emphasis on “politics or literature”—whether the proletarian literary movement should emphasize its political aspect to promote socialism or instead should purely consider its existence as a literary movement. Despite the public readers’ requests for clarification, the controversy ended without any results.

Consequently, Socialist Realism caused the authors of proletarian literature to disregard political aspects and led to the disbandment of the proletarian literary movement in Japan. This was the main factor for the failure of proletarian literature of play any significant role in the Popular Front in Japan from 1935 to 1936.

(学習院大学人文科学研究科博士後期課程史学専攻)